

(別紙様式3)

令和 2年 3月 31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都渋谷区渋谷 4-4-25  
管理機関名 学校法人 青山学院  
代表者名 理事長 堀田 宣彌 印

令和 1 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

## 記

### 1 事業の実施期間

平成 31年 4月 1日 (契約締結日) ~令和 2年 3月 31日

### 2 指定校名

学校名：青山学院高等部

学校長名 (部長名)：渡辺 健

### 3 研究開発名

多様性の受容を基盤とした「サーバントマインド」を持つグローバルリーダーの育成

### 4 研究開発概要

「多様性の受容を基盤とした『サーバントマインド』を持つグローバルリーダー」を育成するために、多方面にわたる学びの機会を用意する。被災地岩手県宮古市の高校と双方向で訪問し合う「みやこ訪問プログラム」、NGOと協働して行うフィリピンまたは東ティモールへのスタディツアーや、知的障がいのある方と行うユニファイドスポーツのイベントなどを通して、新しい気づきとその先の学びを提供する。こうした個々のプログラムを通して学びを得た生徒が仲間を啓発するリーダーとなり、さらに周囲を巻き込んでいくイベント週間「グローバルウィーク」を全校規模で展開する。さまざまなイベント参加をリフレクションにつなげるために Google サービスを利用し、生徒間、生徒・教員間での連携の促進を図る。また、教科を横断しながら平和共生概念を抽出するファイリングシステム「平和共生 LogBook」に取り組む3年間を過ごす中で自ら見つけた課題の解決をはかる「平和共生論文」の執筆へと繋げていく。こうして培ってきた、共生社会に価値を置き課題解

決に主体的に取り組める人材を育むプログラムは、次年度に「総合的な探究の時間」の柱とすることが決定している。

## 5 管理機関の取組・支援実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経理事務の管理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SGH事業推進のための事務職員雇用の継続	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
成果普及 (SGHフォーラム、SGH成果報告会)									○	○		
青山学院大学との 高大連携の充実推進	○	○	○					○	○		○	○
NPOやNGO団体と連携した学習支援		○	○			○		○	○	○		○
SGH専用HP 活動報告会開催等の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会								○				

### (2) 実績の説明

- 高等部事務室に SGH 専用事務職員 1 名の雇用を継続した。
- 成果の普及を促進するため、SGH 専用ホームページの逐次更新を実施した。そのためのサーバーを青山学院の管理機関が提供した。
- 青山学院大学が契約している CMS ソフトウェアを学院の包括ライセンスとして高等部においても活用可能とし、SGH 専用 HP と組合せ SGH ポータルとした。
- 青山学院大学との高大連携促進活動として、下記の機会を提供、または提供のための準備を進めている。
  - 青山学院国際センターを通して、協定海外大学からの留学生を高等部で行われる多言語セッション（チャットルーム）に年間を通してリーダーとして招聘した。青山学院大学に進学した際の協定校留学参加を促進するために、留学オリエンテーションおよび IELTS 講座を開催した。また、高等部の希望する在日大使館に高等部内での講座の開催を要請した。
  - 青山学院宗教センターを通して、認定 NPO 法人 チャイルド・ファンド・ジャパン にフィリピン訪問プログラムの開催を依頼した。
  - 青山学院大学が行うサービスラーニングにおいて、初等部・中等部・高等部との連携の在り方を議論する「サービス・ラーニング・ワーキンググループ」を設置、開催し、多面的な活動ノウハウとリソースの提供について協議した。
- SGH 諸活動、探究学習活動で使用する Google サービスを導入するべく、教員にタブレット端末を配布。NTT ラーニングシステムズ株式会社（教育 ICT 推進部）に講師を依頼し、2 度の教員向け利活用研修を実施した。
- 開発教育協会に講師を依頼し、教員有志に向けた「ファシリテーション研修」を実施

した。

- 2019年11月30日に運営指導委員会を開催し、委員の先生方の専門的見地からグローバル教育の在り方について指導・助言をいただいた。

## 6 研究開発の実績

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SGHオリエンテーション	○											
平和共生LogBookを用いた活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
共生論文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
グローバルウィーク I・II			○			○	○					
共生関連プログラム (東ティモール、宮古、フィリピン)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
都内アテンドプログラム						○	○					
カナダホームステイプログラム				○	○							
English Camp(多文化共生キャンプ)					○							
短期交換留学プログラム	○					○	○	○		○		
Chat Room	○	○	○	○		○	○	○				
高大連携プログラム	○	○	○				○	○		○	○	○

### (2) 実績の説明

- ◆ 平和共生 LogBook (1年生 421名、全員に配布) ・平和共生論文 (3年生 396名、全員が提出)

本校では3年間にわたる教科学習および課外活動の中から、「平和」「共生」という概念につながる箇所を各教科が抽出し、課題として生徒に課している。生徒はそれらの課題を「LogBook」というシステムファイルにとじ込み、ポートフォリオとして蓄積していく。

本年度も下記を実施した。

[国語総合] 『沈黙』を読み、迫害という概念への理解を深めた。(1年生)

[現代史] 現代国語と現代史が協働し、ホロコーストを多面的に学習した。ナチスの民族観を批判し、感想を記載。(1～2年生) 原爆開発の歴史を検証、気づいたことを記載した。(2年生)

[現代社会] 平和憲法についての政府見解の変遷と、解釈についての考察をおこなった。(2年生)

[生物基礎] 東海村の原発事故について学習した。(1年生)

[物理基礎] 原子力と放射線、核の平和利用について学んだことを記載した。(2年生)

[コミュニケーション英語] 映画「Invictus」を観て、スポーツの国際大会の功罪について論じた。(1年生)

ホロコースト時にユダヤ人救済に尽力した人のエピソードを読み、その行為や動機について論じた。(2年生)

[夏休みの宿題] 身近な人の戦争体験をインタビューし、まとめを記載した。(2年生)  
コミュニケーション英語の授業において1人ずつ英語でプレゼンテーションを行った。

[修学旅行関連] 長崎原爆資料館訪問報告、平和講話(被爆体験)を聞いての感想を記載した。(2年生) TVドキュメンタリー「原爆と沈黙～長崎浦上の受難」を観たフィードバックを記載した。(1年生)

[平和共生論文執筆指導] 課題の見つけ方、論の展開、引用法、章立ての仕方などを指導する生徒集会を開催した。

▶ 平和共生論文を用いた活動

3年の初めに全員が6000字以上の「平和共生論文」を提出した。その後、Google Classroomを利用して全員の論文を共有した。お互いがコメントしあったり、同一テーマを扱った者がグループを作ってディスカッションを行ったりして、内容に関する理解を深めた。クラス代表を選出し、SGH成果報告会でプレゼンテーションを行った。

◆ グローバルウィーク

▶ グローバルウィーク I: 6月17日～22日 <全校対象>

「共生～Our Neighbors (隣人)～」をテーマとして、期間中の礼拝の奨励、昼休みと放課後にセッション・ワークショップを行った。昼休みには、主体的に学習を行う生徒の団体が、聴衆となる生徒にパワーポイントを使って活動を紹介するセッションや、ポスターセッションを行い、学びを共有した。

平日毎日行われる礼拝の奨励 (全校生徒が出席)

☆ 特別講師: 河見 誠氏(青山学院女子短期大学副学長)、小田哲郎氏(特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金 ACEF 理事)

昼休みのセッション・イベント

☆ グローバルショーケース: 校内で活動する5つの自主学習団体が、ポスタープレゼンテーションと簡易ステージを使ったミニプレゼンテーションを行った。(関係団体以外の参加生徒100名)

☆ フィリピン訪問プログラム参加者による「フィリピン・デー」: フィリピン訪問で気づいた現地の状況を伝え、教育支援の大切さ共有するプレゼンター

ションを行った。(参加生徒 120 名)

- ◇ スペシャル・チャットルーム：青山学院大学に来ている留学生 10 名と、ボランティア体験の重要性についてグループ・ディスカッションを行った。(参加生徒 86 名)
- ◇ ボランティア部による「バングラデシュについて知ろう」：前月に行われた ACEF の現地スタッフとのセッションで得た知識をもとに、バングラデシュの教育事情を紹介し、問題を共有するためのプレゼンテーションを行った。(参加生徒 200 名)
- ◇ 公益財団法人 スペシャルオリンピックス日本スタッフによる「障がい者スポーツへの理解を深めよう」ティーチイン：スポーツを通じた知的障がいを持つ方へのエンパワーメントを紹介。翌日、本校で行われる「Unified Sports を体験しよう！バレーボールイベント」の参加の具体的内容を共有した。(参加生徒 57 名)

#### 放課後のセッション・イベント

- ◇ 「震災から復興までの道のりを考える」みやこ座談会：青山学院大学で被災地復興支援を行っているグループのメンバーが問題を提起。みやこ訪問プログラム参加希望者と復興支援に興味のある生徒が合流し、ディスカッションを行った。(参加生徒 11 名)
- ◇ 生徒自主学习団体ブルーペコによる「東ティモールコーヒーイベント」：前年度に東ティモールへの渡航を体験した大学生と今年度派遣予定の生徒を中心に、コーヒー生産・農家の実態・教育・平和構築の問題について話し合った。(参加生徒 35 名)
- ◇ 「食べ残し NO ゲーム」：外食した際に起きる食べ残しの問題点を、ゲームを使ってわかりやすく体験する。フードバンクを支援する生徒のグループ、青山セカンドチャンスが主体となって実施した。(参加生徒 21 名)

#### 土曜日の特別イベント

- ◇ 「Unified Sports を体験しよう！バレーボールイベント」：本校体育館において、知的障がいのある方たちのバレーボールチームとの合同バレーボールイベントを開催。その後、カフェテリアで交流会を行った。(参加生徒 50 名)

#### ▶ グローバルウィークⅡ：9月30日～10月7日 <全校対象>

「Get Connected～コミュニティ再生～」：個々が繋がって形成されるのが「コミュニティ」である。構成しているメンバーシップに焦点を当てたセッションやワークショップを多く開催した。SNS がコミュニティを構成する際にどのような影響を与えるか、グローバルコミュニティを構成する多様な文化を一つにま

とめる力がどこに存在するか、などを知る機会を共有することができた。

### 平日毎日行われる礼拝のお話（全校生徒が出席）

- ◇ 特別講師：神田英輔氏（NGO「声なき者の友」の輪代表）、桃井和馬氏（写真家、ノンフィクション作家）

### 昼休みのセッション・イベント

- ◇ 「共同体再生ワークショップ」：神田英輔氏が担当。SNS がいかに私たちの人間関係を破壊するように仕組みられているか、についてレクチャーを聞いた後でグループワークを用い、実際の私たちの「人とのつながり」が、SNS を介してどのように成り立っているのかを体感した。（参加生徒 66 名）
- ◇ 世界を考える「本物の知恵」：桃井和馬氏が担当。聖書で語られている世界観を理解することが、グローバルなスケールで起こる出来事や催しを理解するうえでいかに大切であるか、写真作品や映像資料を通して学ぶことができた。（参加生徒 80 名）
- ◇ 高校生が考える「世界の教育」プレゼンテーション：本校内で活動している 5 つの団体が、それぞれ取り組んでいる国内外の子供の教育問題に焦点を当てたポスターセッションとミニステージでのプレゼンテーションを行った。（参加生徒 120 名）
- ◇ みやこ訪問プログラム報告会：この夏に訪問した宮古市で現地の高校生と協働して学び合った、復興の現状と東京でも起こりえる震災時の対応の仕方などをプレゼンテーション。宮古特産の磯とろろスープを用意し、現地に出かけたときの想いを参加した生徒と共有した。（参加生徒 180 名）
- ◇ ブルーペコ渡航メンバーによる「東ティモールコーヒー試飲会」：東ティモール産のコーヒーを 500 杯用意し、参加者に味わってもらいながらスタディツアーでの学びを共有した。「マイ苗プロジェクト」と称し、現地の農家に苗木を寄付するための活動も行った。（参加生徒 500 名）
- ◇ フィリピン訪問プログラム「支援チャイルドからのビデオレター鑑賞会&クリスマスカードを書く会」：認定 NPO 法人 チャイルド・フアンド・ジャパンのプログラムを通し、本校が支援している現地の生徒からのビデオレターに答える形で、生徒が集まってクリスマスカードにメッセージを書いた。（参加生徒 120 名）

### 放課後のセッション・イベント

- ◇ 宮古を通じてコミュニティ再生を考える座談会：この夏にみやこ訪問プログラムに参加した生徒と被災地の復興を考える大学生のグループが、復興五輪という考え方や震災で被災した際の身の守り方といった現地で習った題材をもとに話し合いを行った。（参加生徒 11 名）

- ◇ 世界の教育と向き合う「世界一大きな授業」：3年生がファシリテーターを務め、教育協力 NGO ネットワークが主催するダウンロード教材「世界一大きな授業」を用いて行ったセッション。貧困から抜け出したり、平和を実現したりするために必要な教育に対して、日ごろ私たちがいかに知識や関心を持たずに過ごしているのかを意識化し、教育への資金拠出の必要性を実感できるようになった。（参加生徒 25 名）

#### ◆ 共生関連プログラム

##### ▶ みやこ訪問プログラム：8月1日～4日 <参加生徒 15名>

「学ぶ防災」ツアーに参加し、現地スタッフから防災について学んだ後、宮古北高校の生徒とともに被災の記憶の風化について様々な学びを行った。（後日、宮古北高校の生徒会メンバーを本校の文化祭に招待した。）海産物の加工所を見学し、販売を通じた支援について考える機会を持った。

##### ▶ 東ティモールスタディツアー：8月4日～11日 <参加生徒 4名>

特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパンの案内で山村の農家を訪問し、コーヒーの収穫を体験。品質を向上させるためにそれぞれの農家で行われている工夫について学ぶ。併せて、様々な世代へのインタビューを行い、今後のコーヒー産業の在り方についてのヒントを得る。伝統的なコーヒーの焙煎法を体験したり、農家から集めたコーヒーが麓の街で追加加工される工程を見学したりした。NGO スタッフへのインタビューや独立記念博物館の見学を通して、東ティモール独立時の闘争について知ることができた。

##### ▶ フィリピン訪問プログラム：3月21日～27日 <参加生徒 8名>

本年度のプログラムは、新型コロナウイルスのため2月時点で現地訪問を中止した。12月に募集が行われた際には定員を超える希望生徒が参加動機書を書き上げた。メンバーが決定した後は例年にならい、読書会や事前学習会の回を重ねた。中止の発表がなされた現在でも、フィリピンにおける貧困の問題、教育支援の必要性についての学習が継続されている。

#### ◆ 国際交流関連プログラム

##### ▶ カナダホームステイプログラム：7月25日～8月7日 <参加生徒 30名>

参加者は多様な民族からなる異なった家族のもとにステイし、交流やインタビュー活動を通してカナダの多様性に触れることができた。帰国後は Google Classroom でリフレクションや情報交換、学び合いなどを行い、充実した事後学習とすることができた。

▶短期交換留学プログラム

英国リーススクール <参加者 4 名>、イタリア レニャーニ校 <参加者 11 名>

2 週間ずつの滞在と学校生活を体験した。交換留学生を本校に迎えた際にはホスト生徒がテーマをもって近隣の散策を計画し、日本の社会・文化に関して意見を交わす機会を持った。現地提携校への訪問の際には各自のテーマを設定し、インタビューやディスカッションを通して学び合う機会を持った。グループごとに設定したテーマは「宗教観」「しつけ・家族のルール」「音楽をどう生活に用いるか」「ことわざと言い伝え」など。帰国後、プレゼンテーションを行った。なお、2020 年 3 月～4 月に予定していたイタリアレニャーニ校への訪問は、新型コロナウイルスのため中止された。

▶多文化共生キャンプ：8 月 25 日～27 日 <参加生徒 23 名>

本校の軽井沢追分寮にて、青山学院大学に在籍している留学生および本校に在籍している留学生を交え、マイクロプラスチックの問題に焦点を当ててグループワークやディスカッションを実施した。また、社会を構成するうえで必要なモノや事柄について議論しながら優先順に並べていく「豊かな社会にとって大切なこと」というワークショップを行い、グループごとの結果を発表、共有した。期間中の会話・議論はすべて英語を用いた。

◆ 高大連携プログラム

▶大使館講座：1 月 14 日 <参加生徒 35 名>

フィリピン大使館より総領事をお招きし、日本との深い関係や歴史上様々な国とかかわる中で文化が変容していく様子についてご講演いただいた。

▶協定校留学オリエンテーション：1 月 9 日 <参加生徒 88 名>

協定校留学プログラムの説明、体験談を聞いた。その後、資格となる IELTS のデモレッスンを受けた。

▶IELTS 特別講座：2 月 25 日～3 月 2 日<参加生徒 30 名>

IELTS の講師を招き、3 年生を対象として実施した。

◆ 事業の評価

校内においては管理職と SGH 委員会のメンバーを中心に、各事業の運営・評価・検証を行った。また、「グローバル社会・学習者としての自己認識に関する調査」として全校生徒対象のアンケート調査を実施し、教員にも SGH プログラムに関するアンケート調査を行った。客観評価としては SGH 運営指導委員会を開催し、事業内容を説明し指導を受けた。

#### ◆ SGH 成果報告会の開催

2019年11月30日に他のSGH指定校をはじめとする学校関係者や生徒保護者を招き、本校PS講堂にてSGH成果報告会を開催した。

#### ◆ 成果の広報・普及事業の展開

- グローバルフェスタ JAPAN2019：9月28日・29日  
お台場で開催された、国内最大級の国際協カイベント。本校の実施するプログラムに参加した生徒が、連携したNGO・NPO団体の手伝いとプレゼンテーションを担当した。
- 青山学院高等部SGH成果報告会：11月30日 <発表生徒18名>
- SGH全国高校生フォーラム：12月22日 <参加生徒4名> 東京国際フォーラムにて開催。
- ACEF秋のセミナー パネルディスカッション：10月19日 ブルーペコが参加<2名> JICAちきゅう広場にて開催。
- 国際理解・国際協力高校生の主張 全国大会：11月5日 国連大学にて開催<発表生徒1名>
- 青山学院初等部における「グローバル特別授業」：2月26日 本校の3年生5名が初等部5年生の4クラスで実施。内容は英語を用いた2組のプレゼンテーションとグループワーク。
- 青山学院広報誌『青山学報』・高等部便り・平和共生委員会通信「ともしび」を発行し、生徒保護者や卒業生にも研究・学習内容を周知した。

#### 7 目標の進捗状況、成果、評価

「多様性の受容を基盤とした『サーバントマインド』を持つグローバルリーダーの育成」を掲げ、日々の礼拝と授業を「平和・共生」という共通テーマで横断する「平和共生LogBook」の取り組みによって、多様性の受容が最優先事項であるという気づきを誘発することを目指してきた。また、海外スタディツアーや国内ボランティア活動から派生するサービスラーニング型の学びで、サーバントマインド（弱者に寄り添う精神）を醸成する活動を促進することができるようになりつつある。生徒の「振り返り」の中にも、その成長を読み取ることができるものが増えてきた。

個々の取り組みの関連性は、それぞれのプログラム参加者が年2回行われるグローバルウィークで発表し合うことにより、学びの共有として形づくられる。その共有された学びの中から生徒個人が自らに問いかけ、問題意識が喚起されていく。ホームルームで論文執筆指導に当たる教員が、このような問題意識を持つ生徒が増えつつあると実感しており、探究的な学びの手法を共有する体制の確立を急ぐ必要性がでてきた。

海外スタディツアーや被災地訪問プログラムは手近なところでの学びと直接リンクす

る。貧富の格差からくる教育問題は近隣の子ども食堂でも学ぶことができ、東ティモールの農家の問題は日本の過疎地の問題に置き換えて考えることができる部分がある。東北の被災地の問題は都心で起こる災害時の問題を解決するヒントとなる。スタディツアー参加者が自分たちの学びを発信すると、近隣で類似した活動している生徒の興味を引きつけることにつながっている。この現象が論文作成にどの程度つながっているかは検証していないが、執筆の際に、実際に起こっている問題を自分に引き付けて考えることができる生徒が増えてきたことは事実である。

その他の海外留学生数、英語力の変化の成果に関しては、アウトカムとして添付用紙に記した数値を参考にすると同時に、本校 SGH 指定 2 年次より年に 1 度行ってきた「学習方策調査」の数値を比較してみる。建学の精神、創立以来の伝統を継承しながら新しい「探究的な学び」につなげていくために、本校がこの 5 年間で行ってきたことを再度振り返り、評価していくこととする。

## 8 5 年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

SGH 指定に際して意識したのは、法人・教職員・在校生が理解、納得しながら、新しい学びの動機付けとして成立することの重要性である。本研究は建学の精神を土台に据えた、予測の難しい未来の世界でも力を発揮しうる奉仕者や学習者であるリーダーの育成に向けたプログラムである。キリストの愛と奉仕の精神を持つリーダーは、ますます価値観の多様化する今後の社会において重要となるが、学校での諸活動がそのことに意味合いをみだし、出発点とすることが大切である。平和共生教育と国際理解教育が、キリスト教の礼拝のある毎日の中でどのような学びの形をとることができるか、一つのモデルを示そうと試みた5年間だった。

本校の精神的支柱である日々の礼拝で、共生社会を実現するための「隣人」となることの尊さが語られる一方で、各教科が抽出する平和・共生に関するトピックをファイリングしていく「平和共生LogBook」が各生徒に入学時に配布される。授業・礼拝・行事で得た学びや、キャリア教育で得た新たな気づきも3年間を通してファイルしていくシステムである。

さらに1年3学期から始まる、個々の生徒が自ら探し出した平和・共生社会を実現する際に解決するべき問題に対して解決策を模索し執筆する「平和共生論文」の活動が定着した。2年次にはクラス内で中間構想発表の場を持ち、お互いの執筆過程に対して評価し合う。3年の始業式に全員が提出し、Googleサービスを活用して、学年全員分の論文が公開される。そののちクラス内発表会を経て、代表論文を選出。全校に向けた発表の場「代表論文発表会」を開催する。個々人の論文はコミュニケーション英語および現代国語の授業でプレゼンテーションの素材としても扱われている。

SGH 指定の5年間にわたり毎年6月と10月の2回、それぞれ「隣人とは」「コミュニティ再生」というテーマでグローバルウィークを設置してきた。「私たちはなぜ、共生社会を実現する者とならなければいけないのか」が日々の礼拝で語られ、昼休みと放課後のワークショップやセッションで、「フィリピン訪問プログラム」「被災地みやこ訪問プログラム」「東ティモールスタディツアー」の参加生徒たち・ボランティア部の部員・有志で社会活動を行う生徒たちを中心とした、発表会・学習会・キャンペーンが行われる。ゲストとして、国連・JICA・奉仕活動を行う教会・NGOなどから講師を招き、礼拝やセッションを担当していただい

きた。自分たちの発見した問題を共有し、二次体験者を増やそうとしたり、類似した問題を各自が探すヒントを提示したりすることに手ごたえを得てきた。

「SGH成果報告会」は教育関係者・学院関係者・保護者等、主に外部の方に生徒の学びを知っていただくためのものであった。会はスタディツアーでの学びの共有、平和共生論文の代表作のプレゼンテーション、英語でグローバル社会や本校での共生教育を語る「トークセッション」で構成され、参観された多くの方の共感を得ることができた。次年度からは本校のグローバル教育・探究学習の成果を全校生徒で共有する新しい形の「探究学習発表会」の実施を計画している。

#### [Googleサービス使用、リフレクション・スキル、eポートフォリオ]

2018年度よりSGH活動の紹介、参加登録、事前資料配布、リフレクションフォーム配布などをGoogle Classroomを使っておこなっている。生徒全員がGmailのアカウントを持ち、ネット上でグループを形成したり、学びを書き留めておいて発信したり蓄積したりできるようになっている。SGH指定当初は青山学院大学のCoursePowerというサービスを利用していたが、利便性の高さより4年目からGoogleへと移行した。なお2021年度から、生徒全員にタブレット端末が支給される。SGH活動やグローバルウィークの後には、参加者にリフレクションフォームを配布。回収した回答を読み込み、次の学びにつなげる可能性を検討してきた。生徒はこのリフレクションをeポートフォリオにコピーすることで、自身の体験からの気づきを簡単に書き留めておくことができるようになっている。

2021年度新カリキュラムへの移行時には、礼拝ではじまる論文を中心とした平和共生教育と、全体で共有する探究型の学びを融合した学習に「総合的探究の時間」として単位を付与する体制に移行したい。そのためにふさわしい活動が提供できる段階にまで来たことが、この5年間の大きな成果であったと言える。

#### (2) 高大接続の状況について

##### [青山学院大学ボランティアセンター、シビックエンゲージメントセンター]

ボランティアセンターが独自に作成した「サービスラーニング・リフレクションハンドブック」をリソースとして提供していただいた。生徒のリフレクションフォームを作成する際に活用している。本校のフィリピン訪問プログラムは青山学院初等部から大学までの児童・生徒・学生が参加する現地の教育支援プログラムであり、みやこ訪問プログラムは青山学院大学、短大との合同プログラムである。そのハブとなり活動を支援しているのがボランティアセンターである。青山学院大学は昨年よりサービスラーニングの講座を開き、学院の初等部から大学までをつなぐプログラムを作成しようとしており、サービスラーニングの現場と学習方策を本校にも提供することを申し出てくれている。2021年度よりボランティアセンターはシビックエンゲージメントセンターと改名され、開発をほぼ完了しているボランティア活動と学びの橋渡しを用いたカリキュラムの実施を開始する。本校とは一部生徒の出席の認可、学問入門講座や現場リソースの提供という形で、一層つながりを強めていく。

##### [青山学院大学高大接続プログラム]

- 学問入門講座：土曜日の午前中に実施。青山学院大学・専門職大学院の教員が、それぞれの専門分野についてわかりやすく講義する。大学の教室を使い、年10回、年間で30講

座程度が開催される。

- 青山スタンダード科目受講：3年生の希望生徒が放課後に大学の授業を履修し、内部進学後にその単位が認定されるという制度の提供を受けている。

#### [青山学院大学国際センター]

- 協定校留学プログラムの早期斡旋：本校生徒が内部進学した際に、青山学院大学が協定を結んでいる海外大学への1年間の協定校留学を4年間のうちの最も適当な時期に体験できるよう、高等部在学中から助言を受けることができる。協定校留学オリエンテーションや留学の際の資格試験の一つであるIELTSに関して、ブリティッシュ・カウンシルから講師を招いた対策講座を提供してくれる。
- 大使館講座：同センターが育ててきた近隣大使館との関係から、大使・総領事・次官を招く大使館講座を提供してくれている。特に、スタディツアーを通して生徒の関心が高まっている在日東ティモール大使館からは、全権大使がこの5年間に2回来校して講演をおこなっていただいた。
- チャットルーム：青山学院大学に協定校留学している留学生在が、昼休みに本校に足を運び、生徒と昼食をとりながら外国語会話のセッションを行う。英語、韓国語、中国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語など、セッションの行われる言語は多岐にわたり、毎回多くの生徒が利用している。

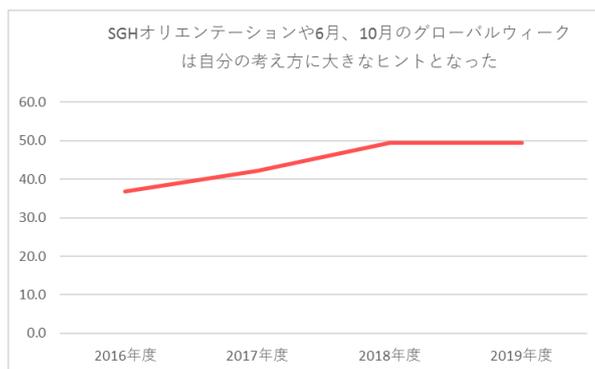
#### [青山学院大学地球社会共生学部]

恒常的にアドバイスを頂いている。昨年度のグローバルウィークの際には、合同でフェアトレードコーヒーに関するセッションを行った。

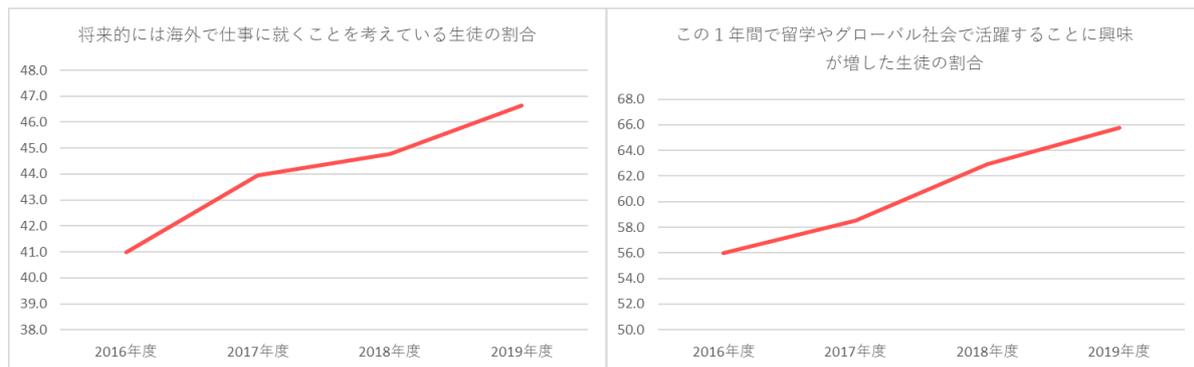
#### (3) 生徒の変化について

SGH指定2年目より毎年全校生徒に対して行ってきた「グローバル社会・学習者としての自己認識に関する調査」というアンケートで得た数値をもとに、この5年間の生徒の意識の変化を見ていく。

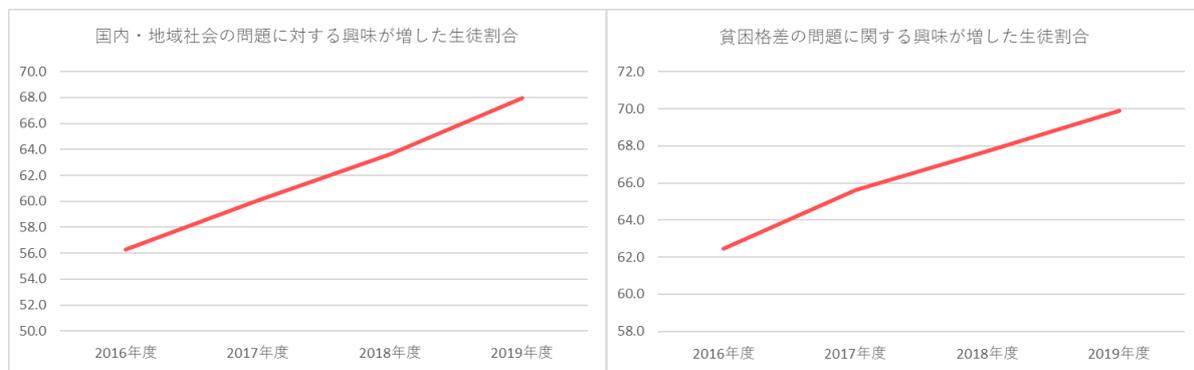
- SGHオリエンテーションやグローバルウィークが自分の考えに大きな影響を与えたか、という問いには16年度で39%であったものが19年度で50%となった。定番のイベントとして定着してきた様子が見えてくる。半面、以前から奉仕活動を恒常的に行ってきた者や、本学院に幼稚園、小学校の段階から在籍している者には、目新しいものと映らなかった可能性もある。



- 大学や就職におけるグローバル志向については、学問内容がグローバル社会に関わる進学先を選ぼうとする者が54%から59%と微増、将来は海外で仕事をしたいと思う者が41%から47%へと変化している。また、留学やグローバル社会での活躍をしたいと思う者が56%から66%と上昇した。併せて、グローバル社会における日本の立場を考える者も58%から66%へと変化している。グローバル人材としてのキャリア形成を考えている者が着実に増していることがわかる。



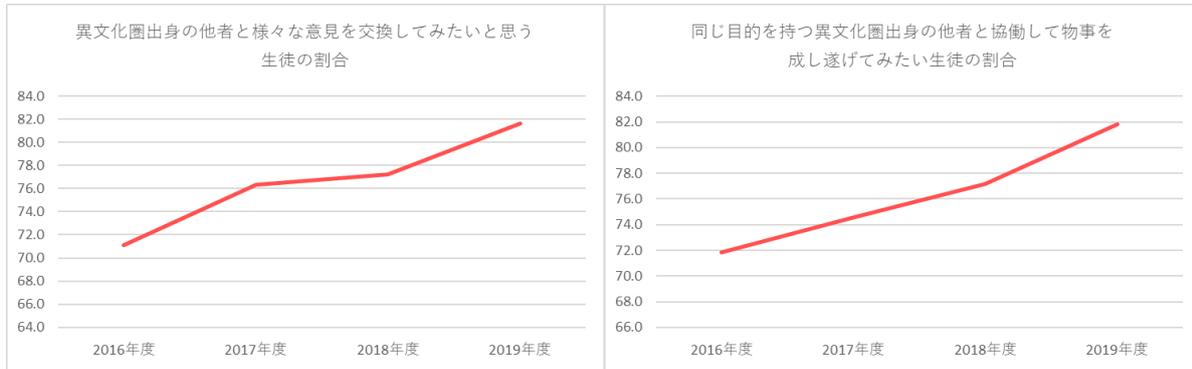
- 国内外を問わず、社会の抱える問題点に気づき始めた生徒の増減を見てみると、国内・地域社会の問題に対する興味が増したと答えた者は4年前の56%から68%と上昇した。平和共生論文の執筆は自ずと生徒の目を社会に向けさせているようだ。貧困格差の問題に興味が増した者は62%から70%へ、社会的弱者に関してどのような理解が必要か考える機会が持てたと答えた者が67%から74%へと、それぞれ上昇してきた。



- また、自分の将来像を描くとき、「社会貢献」がキーワードになる、と答えた生徒が61%から65%へ、将来的に社会に貢献する仕事に取り組みたいと考えている生徒は73%から75%へと上昇している。

社会の問題をローカルとグローバルの双方向からとらえ、社会貢献に意味合いを見いだしていく人生のビジョンを高校時代に身に着けられることは、非常に重要なことである。本校にはもとよりその志向性があったがこの5年間でさらに上積みすることができた。このことは私たちの学校の存在意義を再確認したことに等しく、意味深い調査であったと考える。

- 「異文化圏出身の他者と様々な意見を交換してみたいと思う生徒」の割合は71%から82%へ、「同じ目的を持つ異文化圏出身の他者と協働して物事を成し遂げたい生徒」の割合は72%から82%へとそれぞれ上昇した。さらには、リーダーシップをとることができると思える生徒の割合も58%から64%と増加した。これは主体性に訴えたSGHプログラム全体が比較的うまく機能していることと、アクティブラーニングや発表型の授業が大幅に増えたことからくる、自己効力感の変化だと言っていい。

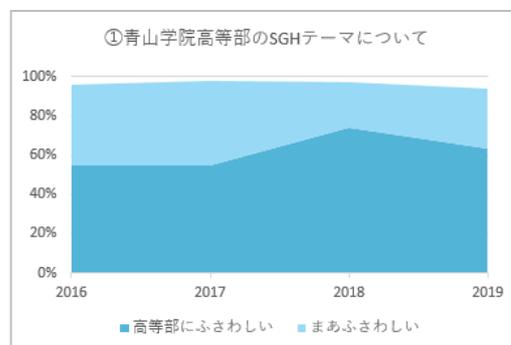


- 論理的な不整合を見抜く力がある、と答えた生徒が5ポイント増加し74.5%、法則性を見つける力がある、と答えた生徒は4ポイント増加して62%となり、平和共生論文執筆に当たり周辺能力が確実に上昇してきている。
- 英語のメディア検索が可能と答えた生徒が56%から58%へ、英語でディベートが可能だとした生徒が38%から40%へ、英語である程度の長さの文章を論理的に作成できると答えた生徒が43%から47%へとそれぞれわずかながら増加している。カリキュラム上は大きな変更がなかったため、生徒の姿勢や意欲がSGHとともに変化しつつある、と考えることが出来る。
- 現在のところカリキュラム上は単位化されていない平和共生論文であるが、執筆した体験が卒業後の学びに役立つと答えた生徒が91%と、厳しい作業を終えて学問の世界に移っていく際の心構えが、SGHを通じた活動の集約として論文執筆後の達成感に表れているといえる。

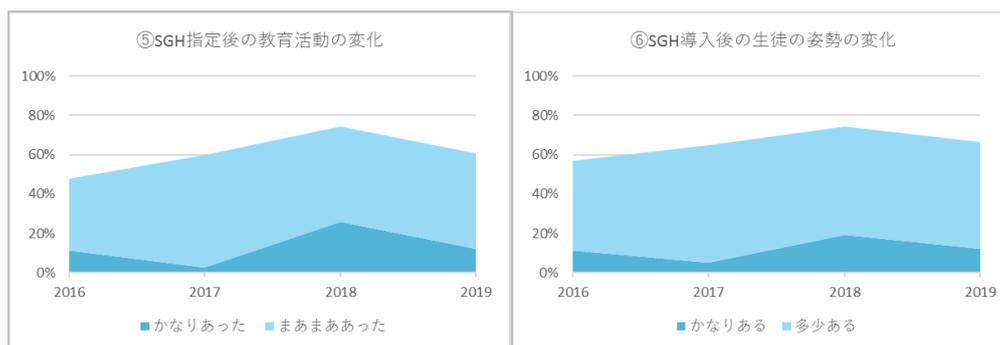
#### (4) 教師の変化について

本校の教員がこの5年間でどのように受け止めて、自らも同時に変わっていくことに気づいてきたか、指定2年次より行ってきた「教員対象SGHアンケート」を用いて検証していく。

- テーマとして掲げてきた「多様性の受容を基盤とした『サーバントマインド』を持つグローバルリーダーの育成」について、ほとんどがポジティブな回答であったなかで、本校にふさわしいと回答した教員が55%から64%（図①）へと上昇している。学校全体に十分に浸透し、校風の一部となってきたようだ。取り組みに対するポジティブな評価は73%から82%になった。



- 教育活動に変化があったか、という問いへのポジティブ回答は47%から60%（図⑤）へ、SGH導入後の生徒の姿勢の変化に気づいたという回答は56%から67%へ上昇し、教育の質的な変化を実感できるようになってきた。



教育方策の変化が生徒、教員にあまねく行き渡るのには時間を要する。改革に向けての粘り強い取り組みが結実しつつあることを実感している。教員の合議によって学校として目指す道の選択を繰り返してきた本校のような学校では、いただいた5年間という時間をかけて教員の理解を得ながら、生徒の変化を迎え入れる準備を進めてくる必要があった。

#### (5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

Google社のサービス、Google Classroomを授業で活用する教員がここ2年間で大幅に増加した。19年度だけでみても、教員全体の勉強会が2回、有志の技術習得セッションが4回行われた。2021年に生徒全員にタブレットを配布するための準備とSGH活動の終盤が重なり、このサービスを使って新しい授業の展開を試みる教員が増えた。

#### (6) 課題や問題点について

[全校型で行ったこと]

SGHに特化したクラスを設けなかったために、グローバルイシューや社会問題に強く興味を抱いた生徒に十分な学びの機会を提供することができなかった。SGH活動を行う意味を問うことから始まり、教員・生徒に広く探究的な学びを起す流れにつながるように、一方で建学の精神や本校の持つ伝統と矛盾のないようにSGHの指定を受けることは、それ自体が大

きなチャレンジであった。したがって、5年間で具体的な学びの手法を手に入れ、それが学校に定着するということまでは至らなかった。本校の方向性はSGHクラスで核を作り全体に拡張していくという手法とは対極的なものであった。

#### [カリキュラム外であったこと]

SGHのためにカリキュラムを改訂することはできなかった。（教職員の労働負担を考えたうえで法人が判断。）生徒の動機付けがすべて内発的なものになり、全校に周知できずに、すべての生徒に学びの機会を十分に提供できたとは言い難かった。

#### [スタディツアーや海外研修の参加人数]

フィリピン、東ティモール、宮古、カナダ、イギリス、イタリアへとそれぞれの目的に応じたツアーや研修を行ってきたが、参加人数に限りがあることが問題視されてきた。全校で1240名という生徒数から考えると、これらの行事に参加できる者は年間に70～80名足らずである。前者3つは全校で課題を共有する前提で行われ、ともに考える機会が充実していたが、後者の3つは全校で共有できる課題の作り込みが十分ではなかった。例年15～20名の生徒が1年間の長期留学に出かける本校にとって、後者は個人のグローバルキャリアに向けた取り組みの色彩が強く、グローバル 이슈を扱う前者とも学びの本質が異なり、得られる学びも全く異質のものである。

#### [生徒の諸活動との棲み分け]

スタディツアーを増やせずにはいたのは教員の負担の問題だけが理由ではない。部活動や生徒会活動の日程とも調整が難しかった。教員はそれぞれに、指導や学びの在り方に対して異なる考えを持っている。そのことが、SGH活動にしっかりとかかわろうという気持ちのある生徒を混乱させてしまった可能性もある。教員もまた多様であることが学校の魅力の一つであり、一枚岩である必要はないものの、新しい学びに対して常に興味を持った者たちの集まりでなければならない。そのことは、生徒が様々な活動に参加でき、彼ら彼女らに新しい学びを与える可能性に満ちた学校であるために大事な要因となることを改めて認識させられた。

#### [ポータル、HP、リフレクション]

授業や諸活動の現場で電子機器を使用する風潮が加速してきたため、青山学院大学の使用しているCoursePowerというサービスを用いてSGH関連の情報や課題の供給と回収を行った。2018年から本校全体でGoogleサービスを使用する方向に方針を転換し、移行に向けての試行・使用が開始されている。この転換期がSGH指定期間と重なったことに難しさがあった。指定期間後半にはリフレクションスキルの導入も積極的に進めたが、生徒がオペレーションに十分に精通しておらず、全体に効果的なリフレクションの手法が理解されたとは言いがたかった。

#### [他校との連携]

SGH他校に積極的に働きかけることができなかったが、2018年度に関西創価高校のグループがフィールドワークの一環として本校を訪問してくださった際には、青山学院大学の留学生も招いて「幸福について考える」ワークショップを持つことができた。

また、フィリピンや東ティモールへのスタディツアーを通して学んでいる生徒たちが、グローバルフェスタやJICAのイベントで他校のグループと知り合い、その学校でのイベントや授業に合流することがあった。しかし学校間での連携は起こることがなく、反省材料となっている。

#### (7) 今後の持続可能性について

「共生探究学習委員会」を立ち上げて、論文執筆を中心とした「総合的探究学習」を単位化し、多くの教員が関わりをもてるような仕組みを作る。この単位化により、主体性と純粋な興味のみならず、高校時代になさねばならない学びを得られるものであることを生徒がより認識しやすく、取り組みやすくなるものとする。生徒の学びを共有するためにうまく機能しているグローバルウィークは指定終了後も残し、成果発表会も「優秀論文発表会」という形で全校規模の集会へと作り替えていく。フィールドワークとして培ってきたフィリピン訪問プログラム、みやこ訪問プログラム、東ティモールスタディツアーはそのまま残す方向で計画である。資金的援助に関しては、青山学院の建学の精神を体現する学びに提供される「AOYAMA VISION」に登録し、法人に理解と援助を得る予定である。

このように建学の精神を基盤に据え、平和共生論文執筆に至る過程を探究的な学びを織り交ぜながら辿るSGHのプログラムは、新カリキュラムと合流しながら持続可能な状態になりつつあると言える。

#### 【担当者】

担当課	青山学院高等部	T E L	03-3409-3880
氏 名	藤井 徹也	F A X	03-3409-5784
職 名	SGH 委員・英語科教諭	e-mail	tefujii@aoyamagakuin.jp